様式Ｃ-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年５月３１日現在

機関番号：３２６１２
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2007～2010
課題番号：１９７１０２０６
研究課題名（和文）　旧ソ連・東欧地域の EU への接近・統合プロセスの総合的比較研究

研究課題名（英文）　Comparative Study of the former Eastern Europe and the former USSR: the process of approaching and integrating to EU

研究代表者
廣瀬　陽子（HIROSE YOKO）
慶應義塾大学・総合政策学部・准教授
研究者番号：３０３４８８４１

研究成果の概要（和文）：
本研究は、かつては共に共産圏であった旧ソ連、旧東欧諸国（特に黒海地域）の EU への接近・統合プロセスを明らかにすることを目的に、文献研究と現地調査によって比較検討を進めたものである。特に、紛争勃発と平和構築のプロセス、未承認国家、民主化、経済発展、エネルギーポリティクスなどを中心に両地域を比較した。歴史的背景に加え、欧州への地理的な近さ、ロシアの影響力の強さなどが特に両地域の違いを生んでいることが分かった一方、旧ソ連・旧ユーゴスラヴィアに見られるような「連邦解体後」の共通問題なども明らかになった。

研究成果の概要（英文）：
This study aimed to clarify the former communist states' approaching and integrating process to EU by comparative research between the USSR and the former Eastern Europe, especially in the Black Sea region, using the materials and field research focusing on the process of conflict and peace-building, unrecognized states, democratization, economic development, energy politics mainly. I made clear that historical backgrounds, geographical proximity to Europe, and Russian influences make the difference between the 2 regions, on the other hand I found that common problems of "post-federation" are still serious such as the former USSR and the former Yugoslavia.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	1,300,000	0	1,300,000
2008 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009 年度	0	0	0
2010 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
総　計	3,300,000	600,000	3,900,000

研究分野：国際政治、旧ソ連地域研究、紛争研究

科研費の分科・細目：複合新領域分野・地域研究分科・地域研究細目

キーワード：
欧州近隣諸国政策、民主化、経済発展、平和構築、黒海地域、多極化、未承認国家、エネルギーポリティクス

１．研究開始当初の背景

2008 年 8 月にグルジアとの間でいわゆる「グルジア紛争」が勃発したが、その背景には多くの国内的、地域的、国際的問題があったが、なかでも、欧米の旧ソ連圏への関与の増大や NATO の西方拡大、ひいては欧米諸国のロシアの勢力圏への浸食はロシアをグルジア攻撃に駆り立てた理由のなかで大きな位置を占めると言ってよい。それ以後、欧米諸国は旧共産圏、とりわけ旧ソ連諸国に対する政策に対し、極めて慎重になっている。そのため、2011 年の今現在はあまり表面に出てこなくなっているが、本研究を開始した 2007 年度は、まだ EU の拡大路線が顕著で、同年 1 月にルーマニアとブルガリアが EU の第 6 次拡大で加盟を果たした直後の時期であり、EU 拡大の議論が積極的になされていた。そして、EU 拡大の問題は旧ソ連地域を専門とする者にとって、極めて重要と感じられた。

当時でも、EU 拡大の研究は、内外で多くの研究者が非常に充実した形で進めていた。だが、それらの研究は EU および EU に加盟することが想定されているいわゆる欧州諸国の側の視点に立ったものに限定されていると言ってよかった。地理的な概念からは EU から遠いが、EU 入りを希望し、かつ EU 側も一定の関心を示している諸国からの視点に立った研究は、それまでほとんどなされてこなかったと言える。

また、EU の拡大の副次的な動きと言ってよい、研究開始当時進められていた EU の ENP（欧州近隣諸国政策）や、のちに着手された EU の東方パートナーシップ政策については、まだ学術的研究がほとんどなされていない状態であった。

そこで、旧ソ連からの欧州への接近や統合の動きを、南コーカサス三国を事例に検討し、さらに同様の検討を中東欧諸国でも行って比較研究したいと考えたのである。そこでは、非 EU 諸国が EU に受け入れられるための条件を明確にした上で、EU 加盟が地理的には可能と考えられる旧ソ連・東欧諸国側が EU に対してどのようなスタンスを取っているか、特に加盟を希望しているのか否か、また加盟のためにどのような努力をしているのかを、地政学的要件と実質的な発展状況も加味しつつ明らかにしようと考えた。

なお、本研究は、当初 2007 年度から 2009 年度までの 3 年間で行うということで申請し、受諾されていたが、2009 年に出産し、産後休暇・育児休暇取得のため、1 年間、本課題の研究を中断したため、終了年次が 1 年後に延びた。

２．研究の目的

本研究では、冷戦終結後の欧州地域の旧共産圏、すなわち、旧ソ連・東欧諸国が、どのように政治・経済発展を遂げているか、また紛争を解決して平和構築と安全保障を進めているかを、EU との関係をかぎにして、比較研究することを目的とした。

特に大きな軸を据えている南コーカサス地域については日本ではそもそも研究が大変少なく、南コーカサスと EU の関係を明らかにするだけでも非常に独創的で学問的に大きな意義を持つと思われたが、さらに中東欧・旧ソ連諸国を対照とした比較研究を行うことは、本研究の意義をさらに高めると考えられた。何故なら、南コーカサスのみを対象とすると、その特殊性を指摘するだけになっ

てしまい、その全体的な位置づけが出来なくなり、地域研究が陥りがちな「地域研究の特殊論」という悪例を踏襲することにもなりかねないからである。しかし、中欧や東欧諸国の状況とも比較を行えば、地政学的な位置づけや歴史的背景、指導者の性格などが共産主義からの脱却および EU との統合にどのような影響をもたらすのか、ということを指摘できるだけでなく、アジアの脱共産化など、更なる大きな比較検討や包括的議論の基盤を提供できると考え、今後の可能性も非常に多面的に想定していた。

また、EU 加盟の要件こそが、非 EU 諸国の政治課題そのものだとも言える。つまり、紛争解決と平和構築、民主化、経済発展、人権や自由の保障などである。そのため、本研究は旧ソ連・東欧諸国の諸問題の解決の示唆をも提供できる。

このように、多面的な学術的貢献を果たすこと、地域発展への視座を与えることを最終的なゴールとした。

３．研究の方法

本研究は、文献調査と現地調査を総合的に組み合わせることによって進めた。比較の事例としては、以下４つのカテゴリーを設ける。①ENP対象国であるが、紛争・民主化など課題が多い旧ソ連諸国（代表として南コーカサス）：アゼルバイジャン、グルジア、アルメニア、②旧共産圏としては早い時期EUに加盟済みの中欧諸国：ハンガリー、チェコ、③2007年の第6次EU拡大でEUに加盟した東欧諸国：ルーマニア、ブルガリア、④さらにその次のEU拡大で加盟が想定されているが、紛争・民主化など課題が多い中欧諸国：アルバニア、マケドニア、セルビア、モンテネグロ（2006年6月にセルビア・モンテネグロが相互に独立宣言し分離）。これらの分類はEUへの近さを基準に行った。すなわち、EUに加盟している（②）、EUへの加盟が予定されている（近年（③）、後年（④））、EU加盟は想定されていないがEUが接近をしている（①）、という分類である。これらの比較により、EU加盟の要件とは何か、また発展後発国はどのように発展を進めていけばよいのかということが明らかになる他、EU拡大の背景にある安全保障の問題や地政学的問題も明らかになることを想定していた。

現地調査では、資料収集はもちろん、現地の政策担当者、学者などにインタビューをし、社会･経済水準などについても調査を行った。また、国民の意識調査も行いたかったのだが、色々と努力したものの、不可能であったため、各国で行われた信頼できる社会調査などの結果を利用することとした。

南コーカサス研究については、申請者の蓄積があるため、まずは旧東欧地域の現地調査を優先した。だが、2007年度に行った②、③に属するチェコ、ハンガリー、ルーマニア、ブルガリアにおける調査で、それら諸国とコーカサス地域との比較は「あまりにかけ離れている」が故に、有意ではないという結論に至った。そこで、かつて（形式は異なるが）共産主義を維持しており、連邦解体と民族紛争、政治・経済改革などの痛みを共有していた旧ソ連と旧ユーゴスラヴィアの比較に集中していく方針に切り替えた。また、2008年くらいから、「黒海地域」という地域枠組みに注目するようになり、それらに含まれるBSEC（黒海経済協力機構）やGUAM（グルジア、ウクライナ、アゼルバイジャン、モルドヴァという旧ソ連の加盟4カ国の頭文字をとった地域協力機構）の枠組みにも留意して研究を行うようになった。

2007～2011年には、文献調査に加え、以下のような現地研究を行った。

2007年には、チェコ、ハンガリー、セルビ

ア、ブルガリア、ルーマニアで現地調査を行った。

2008年度には、①のアゼルバイジャンとロシアで現地調査を行った。ロシアでの現地調査は、研究開始当初は予定されていなかったが、前述「グルジア紛争」により、ロシアのコーカサスおよび世界における影響力が富に増し、またこのことが旧ソ連地域の親欧米路線に大きなネガティブな影響をもたらし、またNATO拡大が旧ソ連に及ぶ動きを事実上封じ込めることとなり、本研究においてロシアの動向が極めて重要となったことから、ロシアでの調査を急遽加えることにした（なお、ロシア出張は別資金による）。

2010年度には、マケドニア、モンテネグロ、コソヴォで調査を行った。また、ドイツで行われたアゼルバイジャンに関する国際会議にも出席し、専門家と議論を深めた。

４．研究成果

本研究の成果は、５に記載するもののみならず、2011年夏に出版予定の拙著（アスキー新書）と、2012年度内をめどに出版予定の拙著（NHK出版）において発表する予定であり、さらに2011年11月に米国・ワシントンDCで行われる予定のアメリカスラブ学会・年次大会でも「The Perspective on Peace-building of the Unrecognized States from the Comparative Point of View」というタイトルで報告することが決まっている。

本研究で明らかになったことの概要を以下に記す。

第一に、旧ソ連圏といっても、その性格にはかなりの差異がある。中欧、東欧、旧ユーゴスラヴィア、旧ソ連それぞれで歴史的背景、地理的位置に大きな違いがあり、比較には必ずしも適していないということである。特にEUとの接近や統合を考えた場合、その地理的位置は決定的な意味を持つことが分かった。EUはその政策を常にEUにとって有益かどうかに基づいて決定している。EUサイドは、中欧、東欧、旧ユーゴスラヴィアは「欧州」だと考えているが、旧ソ連については、欧州の外側に位置すると考えている。欧州が旧ソ連のヨーロッパ部（コーカサス地域を含み、ロシアを除く）に対して進めてきた「欧州近隣諸国政策」や「東方パートナーシップ」は、それら諸国とEUの接近を意味するものではなく、EU側はEUの安定を保つためにEUの外側の安定を保つための「EUにとって利己的な」政策だと位置づけており、むしろ、それがEUの外側の「境界線」となっているのである。

とはいえ、第二に、旧ユーゴスラヴィアと旧ソ連の比較には一定の意味があるという結論に至った。両地域の歴史的・地理的背景は異なるが、連邦解体、連邦内からの新興諸国の独立、民族紛争、民主化、経済発展など、冷戦終結後に多くの共通の経験をしているだけでなく、両地域の下からの民主化運動や未承認国家をめぐる動きには多くの関係が見られ、比較検討する意義があるという結論に至った。

特に、第三に冷戦後の世界の変化を決定づけたグルジア紛争は、旧ユーゴスラヴィアの問題と旧ソ連の問題の関連の深さを印象付けた。特に、欧米諸国が旧ユーゴスラヴィアのコソヴォの独立を承認したことは、グルジア紛争の大きな原因の一つになっただけでなく、ロシアがグルジアの未承認国家であるアブハジアと南オセチアの承認を誘引することとなった。両地域の紛争の進行プロセスや和平プロセスについても比較検討すると興味深い点が多々ある。

そして、第四に両地域の全ての諸国ないし人々が欧米主導の動きを喜んでいるわけではないということも指摘できよう。また民主化

プロセスも、旧ソ連諸国と旧ユーゴスラヴィアの中で紛争の被害や影響を受けたセルビア、モンテネグロ、ボスニア・ヘルツェゴビナ、コソヴォについては、まだ多くの課題を抱えており、比較検討すると興味深い論点がいくつも見られた。セルビアの民主化運動が、グルジア・ウクライナの「色革命」と関係があることも重要である。

とはいえ、第五に、旧ユーゴスラヴィアと旧ソ連の命運を決定的に分けているのはやはり両者の地理的な位置である。欧米諸国がコソヴォの国家承認をする一方、旧ソ連の未承認国家の独立承認をしない最大の理由は「欧州に位置しているか否か」という地理的根拠にある。欧米の政策当事者は一様に、コソヴォは欧州に位置するからこそ、独立させる必要があると述べ、また、欧州の安全を守るためにその「外壁」である旧ソ連の安定・民主化を支持するのだと主張する。

このように、本研究により、主に五つの論点が浮かび上がった。今後、さらなる関係文献の読み込みによって、これら論点に肉付けをし、先述のように学会報告や著書の形でまとめ、広く学界、一般に発表していきたい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１６件）

1.廣瀬陽子「米露リセットの限界とグルジア問題」社団法人国際情勢研究会『国際情勢紀要』No.81（2011年2月）、267-280頁【査読なし】。
2.廣瀬陽子「グルジア紛争後のトルコと南コーカサス諸国の関係　―アルメニアとトルコの和解プロセスを中心に」『中東研究』第510号（2010/2011 Vol.Ⅲ）、94-111頁【査読なし】。
3.廣瀬陽子「グルジア紛争後の動向：新たな動きと変わらない現実」社団法人国際情勢研究会『国際情勢　紀要』No.80（2010年2月）、269-287頁【査読なし】。
4.廣瀬陽子「イランとロシア、コーカサスの国際関係　―最近の事例から―」『中東研究』第505号（2009/2010　Vol.Ⅱ）、94-111頁【査読なし】。
5.廣瀬陽子「グルジア紛争―その背景とその後の世界―」『学士会会報』2009-Ⅲ（第876号）、2009年5月1日発行、59-64頁【査読なし】。
6.廣瀬陽子「旧ソ連地域における紛争の現況と和平の展望」スタジオジブリ『熱風』2009年3月号（特集：戦争）、19-26頁【査読なし】。
7.廣瀬陽子「コーカサス地域の視点から捉えるグルジア紛争とその影響」『ロシア・ユーラシア経済』2009年3月号（特集：ロシア・グルジア紛争の検証）、2-19頁【査読なし】。
8.廣瀬陽子「「新冷戦」議論と米ロ関係改善の展望――グルジア紛争にみる両国の対立と国内要因」『国際問題』2009年3月号（焦点：オバマ政権の危機対応戦略）、26-40頁【査読なし】。
9.廣瀬陽子「コーカサスの未承認国家問題：グルジア紛争後の背景と紛争後のコーカサスにおける平和構築の動き」社団法人国際情勢研究会『国際情勢　紀要』No.79（2009年2月）、289-304頁【査読なし】。
10.廣瀬陽子「グルジア紛争が環境に与えた影響」平成20年度文部科学省学術フロンティア推進事業　最終研究成果報告書『デジタルアジア構築と運用による地域戦略構想のための融合研究』2009年3月、61-71頁【査読なし】。
11.廣瀬陽子「コーカサス事情―「高貴な野蛮人」と呼ばれる人々」集英社『すばる』2009年2月号、248-253頁【査読なし】。
12.廣瀬陽子「グルジア紛争をどう捉えるか―旧ソ連地域における未承認国家の問題」『外交フォーラム』2009年1月号（No.246）、8-14頁【査読なし】。
13.廣瀬陽子「「凍結された紛争」はなぜ熱戦化したのか：グルジア紛争の本質を探る」『時事トップ・コンフィデンシャル』2008年10月3日号、2-7頁【査読なし】。
14.廣瀬陽子「ロシア・グルジア紛争で緊迫するコーカサス情勢」『ロシアＮＩＳ経済速報』2008年9月5日、NO.1439、1-11頁【査読なし】。
15.Yoko HIROSE, "Azerbaijan-a Regional Hub," *Visions of Azerbaijan*, Volume 3.2, Spring 2008, pp.4-9【査読なし】.
16.廣瀬陽子「CIS諸国の新動向：大統領交代と国際情勢の影響に着目して」『ロシアNIS調査月報』2008年6月号、1-13頁【査読

なし】。
※その他、エッセー、WEB での論考発表、新聞における記事掲載、新聞連載（日刊工業新聞 2008 年度下半期）、本研究にかかわる分野の映画の解説文章など多数。

〔学会発表〕（計 4 件）
1. Yoko HIROSE. “Future Perspective of Japan-Black Sea Area Cooperation,” presented in English at The Third Japan-Black Sea Area Dialogue, at International House of Japan, Tokyo, Japan, 27 January 2010.
2. Yoko HIROSE, “Unrecognized States in the Macro-regional Context of the Black Sea Rims,” presented in English at AAASS(American Association for the Advancement of Slavic Studies) 2008 Convention, Session: 10-45 “The Wider Black Sea-Caspian Region: Powers, Players and Stakes” at the Marriott Hotel in Philadelphia, U.S., 21 November 2008.
3. Yoko HIROSE, “‘Westernization’ or modernization on an indigenous basis? : Focusing on the Japanese case and the former USSR countries’ cases,” presented in English at “the International Forum: Expanding the Role of Women in Cross-Cultural Dialogue (Section 3: National Consciousness as a Shield against Turning People into “Particles of Globalization”), Baku, Azerbaijan, 11 June 2008.
4. Yoko HIROSE, “The task of functional cooperation in the Black Sea Region,” presented in English at The Second Japan-Black Sea Area Dialogue, at The Conference Room of the Japan Foundation, Tokyo, Japan, 21 November 2007.

〔図書〕（計８件）
【単著】
1. 廣瀬陽子『コーカサス　国際関係の十字路』集英社新書、2008 年 7 月、総 220 頁。※第 21 回「アジア・太平洋賞」特別賞受賞(2009 年)。
2. 廣瀬陽子『強権と不安の超大国・ロシア――旧ソ連諸国から見た「光と影」』光文社新書、2008 年、総 278 頁。

【共著】
1. 廣瀬陽子『ロシア・拡大 EU』（羽場久美子・溝端佐登史編）、ミネルヴァ書店、2011 年、243-264 頁。
2. 廣瀬陽子『ジェノサイドと現代世界』（石田勇治・武内進一編）、2011 年、勉誠出版、195-224 頁。
3. 廣瀬陽子『チェチェン　廃墟に生きる戦争孤児たち』（オスネ・セイエルスタッド（青木玲・訳））、2009 年、白水社、409-420 頁。
4. 廣瀬陽子『多様性と可能性のコーカサス――民族紛争を超えて』（前田弘毅編）、北海道大学出版会、2009 年、59-96 頁。
5. 廣瀬陽子『「対テロ戦争」の時代の平和構築：過去からの視点、未来への展望』（黒木英充編）、東進堂、2008 年、63-81 頁。
6. 廣瀬陽子『石油・ガスとロシア経済』（田畑伸一郎編）、北海道大学出版会、2008 年、219-250 頁。
※その他、ムックや年鑑類への執筆多数。

〔その他〕
ホームページ等:
(1)自身のホームページ（日本語・英語）：
http://web.sfc.keio.ac.jp/~hiyoko/
(2)WEB での連載２サイト
・朝日 WEB　RONZA・シノドス・ジャーナル
http://webronza.asahi.com/synodos/
・WEDGE Infinity
（ウェッジ・インフィニティ）：
http://wedge.ismedia.jp/category/russia

６．研究組織
(1)研究代表者
廣瀬　陽子（HIROSE YOKO）
慶應義塾大学・総合政策学部・准教授
研究者番号：３０３４８８４１
(2)研究分担者
該当なし
(3)連携研究者
該当なし